

第四章 誘拐・殺し舞台

1

六月七日、午後八時三十分、富山県警、黒部署は重ぐるしい空気に包まれた。

報道課制が敷かれていたので、重大事件発生のニュースはマスコミ関係者にも、洩れていなかったが、特別捜査班の面々は皆一様に顔を硬張（こわば）らせていた。

黒部署二階の宿直室に捜査本部はおかれた。

「宇奈月の駐在所には三名を増員、至急当地に向かわせました」

捜査員の一人が、特捜班の指揮をする署長に報告をした。七人の捜査員が、置部屋に控えていた。

「雷光荘ホテル支配人の長門作之介を名指しで、犯人と思われるものから、孫の雅樹くん、五歳の誘拐を匂わせる電話が入ったのが、本日、午後六時四十五分頃。長門作之介より、宇奈月駐在所に、雅樹くん誘拐の通報が入ったのが午後七時二十三分です」

捜査員がメモを片手に事件発生の状況を全員に説明した。

「その後の犯人よりの連絡は？」

「初めの一回きりで、その後、連絡は入っております」

「犯人側は作之介氏を電話口に呼び出し、お前の孫を誘拐した」と一言告げて電話を切った。声の感じから三十代の男のとばに訛（なま）りはなく、作之介氏の話では関東弁に聞こえたとある」

すでに情報を得ていた署長が、捜査員の紋切り型の説明にあき足らず、途中から代弁をした。

「作之介氏は宇奈月町では旅館業組合の理事長もつとめる町の有力者だ。資産家であることから、身代金要求の営利誘拐の線が強いが、第一回目の電話連絡ではそのことには触れていない。それから通常、誘拐事件の場合、警察に通報しないよう犯人側は念押しをしてくるケースが多いが、それも無い。場合によっては怨恨による犯行という可能性も考えられるから、作之介氏自身の周辺にそのような事実がないか洗ってみることも必要だ」

と署長はことばを重ねた。

「家人が雅樹ちゃん姿が見つからないのに気づいたのが、午後五時三十分すぎ。長門家はホテルから徒歩十二、三分離れた宇奈月神社裏手に居を構えており、父親も母親も夕刻から夜にかけては接客のためにホテルに行き留守、お手伝いの六十代の女性が家事を見ている。雅樹ちゃんやんが宇奈月神社の境内でひとり遊んでいるのを通いのお手伝いの女性は午後四時三十分頃、境内を通りすぎたとき眼

にしており、雅樹ちゃんに声を掛けている」

捜査係主任の部長刑事が、宇奈月署の警官が集めた情報を述べた。

説明を続ける。

「夕刻になったのでお手伝いの女性が、雅樹ちゃんを宇奈月神社境内の場所まで迎えに行ったのが午後五時三十分頃、が、雅樹ちゃんの姿はなく、お手伝いさんは雷光荘ホテルに電話連絡、所在をたしかめたが、雅樹ちゃんは雷光荘ホテルには来ておらず、騒ぎが持ち上がった。八方手をつくし探している最中の午後六時四十五分頃、犯人から一回目の連絡が入った」

「人命の尊重が第一である。幼い命が、われわれの捜査手腕にかかっている。現状では犯人よりの二回目の接触を待つしかないが、いたずらに犯人側を刺激しないことが必要だ。本部としては身代金要求があつた場合、それに応じる体制で臨む」、

と捜査本部責任者の署長が、険しい顔つきになり言った。

別の捜査員が部屋に入って来て、手配完了の報告をした。

「北陸自動車道の各料金支払所に通過車のナンバー確認のための緊急手配をしました。国道八号線、並びに支線道路には覆面パトロールカーを配置、不審車の発見につとめるよう指示を出しました」

「よし！遠くへ行くとしても、北陸自動

車道を利用するしかない。土地の者なら、捜査網は縮まる。いいか、幼児誘拐事件は初動捜査が事件解決の明暗を握る。全員不眠不休で臨む決意でやってくれ」

部長刑事が捜査員の顔をひとわたり見まわし、決意を強いた。

宿直室に引かれた電話が鳴り、部長刑事が受話器をとる。

一とおり相手の話を聞いたあと、

「わかった。ねばり強いけ。犯人（ほし）はそちらに連絡して来る可能性が大なんだからな」

と念押ししし電話を切った。

「雷光荘ホテル内に設置した電話傍受班からですが、犯人からはまだ二回目の連絡は入っておりません」

署長に捜査係主任は報告した。

2

「おい、まだ、連絡はないのか。金なら払う。有金全部払うから、孫の命だけは救ってくれと相手には伝えるんだ」雷光荘ホテルの地下一階の従業員宿泊室内に設けられた電話傍受班に対し、作之介は怒鳴りつけるように言った。

「ですから、犯人側から電話が入った場合は、あなたに應對していただくわけですから。どうか落着いて下さい。こちらが激高していると冷静な対応ができなくなります」

「冷静にだと？こんな場合に冷静になれ

などと、よく、そんなことが言えるものだ」

「ご心痛はお察し申し上げますが」

チームの責任者の中年の刑事が、なおも、作之介をなだめにかかった。

「お父さん、わたしたちだって」

雅樹の父親の栄（さかえ）が言った。栄は養子の身で万事控え目にし、作之介と付き合ってきた。そんな習癖のせいで、こんな緊急事態のときも、作之介に対するときは声が小さかった。

「雅樹は雷光荘ホテルの後継ぎ息子よ。」

もしものことがあつたら……」

母親の奈美子も、ことばをのんだ。

作之介とは親娘の関係にあるから、二人とも姿かたちがよく似ていた。

奈美子は大柄で旅館の女将としての貫禄が身についていた。

その点、栄は長身だったが、ひよろりとしていて、いかにも養子の身をかこっている自信のなさが態度の端々にあらわれていた。

「しかし、なぜ、わしを名指しにして来た？ねっ、刑事さん」

「さあ、それは……」

現段階では答えられるはずもないことを作之介は刑事の一人をつかまえ訊いた。それだけ作之介は焦燥の感を強めていたのだ。答えようもなく刑事は腕時計の目盛りを読んだ。

午後七時四十三分の時刻になっていた。

ホテルの上階の大宴会ルームでは、宴

会が盛り上がっている最中で、カラオケの唄声や、人々の笑いの声が渦になり巻き起こっていた。地下一階にとどく声は遠いさんざめきしか伝えては来なかったが、この場に居合わせている者の神経には障（さわ）った。

部屋中をうろろと歩きまわっている作之介を捉え、宇奈月署の刑事が再度、同じことをたずねた。

「相手にことばの訛りはなかったんですねえ。さっきのお答えでは土地もんではないということでしたが」

「あれは、東京もんの齒切れのよさがあった。客商売をしているからそれぐらいのことはわかる」

「人種は？その直感でいいのですか」

「ものおじしたところがなかった。お前んところの雅樹を預かっている。次の電話を待て、それだけ言って電話は切れた。ぶつきら棒な言い方だ」

「その前にあなたの名をたしかめた」

「長門作之介さんか？とね。なぜ、栄や奈美子でなく、わたしなんだ？」

「あなたにとって眼に入れても痛くない初孫の雅樹ちゃんですからね。内部の事情に通じた者なら、酷いことはしませんよ。顔見知りの線なら」

「しかし、あの声は他所者（よそもの）の声だった」

「ともかく、次の連絡を待ちましょう。」

さつきも申し上げましたが、犯人から連絡があったときは、落ち着いて電話に

対応して下さい。こちらが、かつかし
ていると、相手も異常状態にありますか
ら、言いたいことだけをさっさと言い電
話が切られて、しまう可能性があります
。相手が身代金を要求して来た場合です
が、要求して来た金額より、逆にこちら
が吊り上げる作戦はいかがですか」

「身代金を吊り上げる？」

「人命にかかわっていることだから、金
はいくらでも払う。相手が五千万円と言
えば、七千万円は用意すると持ち掛ける
とか。そうすれば犯人側は、営利誘拐の
場合ならということですが、すぐに電
話は切りませんよ。その間に、われわれ
は電話の逆探知をし、発信先をたしかめ
る。ともかく、二分は下さい」

「二分か」

「お母さんにも一役買ってもらったほう
がいい。子供の声を聞かせて下さいと相
手に訴える。時間が稼げるでしょう」

刑事の注文に、作之介と奈美子は頷い
た。雷光荘ホテルの裏手は小高い山にな
っている。いまは夜のこと、杉林は闇
に包まれていた。

二人の男がその暗闇に紛れて、雷光荘
ホテル玄関前の駐車場の片隅で、さつき
から一連の動向をチェックしていた。

まさしく闇の中の声、二人の男は時折
り、会話を交わしたが、雷光荘ホテルに
いる者たちには、もちろん、その声も姿
もとどいてはいない。

「警察のおじさん連もマヌケだよな。や

っぱ田舎の大事件、隠密行動しているようでも見え見えじゃないの。電話の傍受体制、それでも結構、短時間でこなしだな。その点は褒めてやろう」

「身代金要求はいくらかって、いま、考えている？」

「依頼主から好きなかだけ要求しろって、まったくこれ無責任な話だぜ。やってられねえよな」

「一億円と吹っ掛けてやるか。どうせ払えっこねえ。揃えたとしても新聞の札束だよな」

「この田舎じゃ、いいとこ二千万円よ。やってられねえよ」

「一晚の泊まり客があのホテルで約三百人、満杯として、一日の売上はざっと四、五百万円か」

「どうせ、おれたちのは嘘っぱち作戦だろ。かっこよく一億円と切り出してやるか」

二人の男は誘拐ゲームを楽しむ気の会話を交わした。嘘っぱち作戦？謎めいた文句も口にした。間もなく、男二人は、山際の地から出、黒部川沿いのほとりに停めてった自家用車に乗り込んだ。

富山ナンバーの車で、国産車、目立たない備えと言えた。男は二人とも無口になった。魚津は富山湾に面した港町で、漁港として知られていた。

夜のこと、海を望むことはできなかつたが、漁船の火が沖合いに二つ三つと浮いているのを二人は目にした。

漁港の突堤の近くまで、二人を乗せた車は乗り入れた。

一台の冷凍車が倉庫の建物の陰からあらわれた。両方の車は連絡がついていたらしく、冷凍車のほうが、二人の乗った国産車に接近した。

暗闇の中で、二台の車はヘッドライトを消し、男が三人、車から出、顔を付き合わせた。

「お荷物を受けとってもらうぜ」

と、国産車から降り立った男の一人が言った。国産車の後部トランクから、小さな包みが冷凍車の運転手に渡された。

発泡スチロール製の少し大きめの箱で、表はガムテープでしっかりと止めてあった。手で抱えとれるほどの大きさの箱だった。

「あとは一人で充分さ。届け先をまちがえるな」

と、国産車組の一人が言った。その男だけが国産車にもどった。冷凍車には二人の男が乗り込んだ。

わずか二、三分の間の、闇の中の取り引きだった。

二台の車は右と左に別れた。

誘拐事件が発生した六月七日は、仲条は宿直番だったので社に待機していた。

警察側からの事前連絡で、報道管制

が敷かれていたので、仲条も取材活動は控えた。

東京本社 of 森中にだけは、富山・宇奈月町で発生した誘拐事件のことは知らせた。

森中が、比呂あすか殺人事件を追っている過程で、室堂建設の会長、長門蓮作に関心を持っていたからである。誘拐された長門雅樹は、蓮作の曾孫（ひまご）に当たるので、一連の事件にもしかしたら関係があるかも知れないと、仲条は考えたのだ。

「どうしてこうもまた富山発で事件は発生するのだろうか。まるで富山に因縁のあるあの黒い魔符に魅入られているような話じゃないか」

と森中は、はじめに言った。

「森中さんの考えでは、長門蓮作は、黒い司祭者の中の一人である可能性ありと言うことになっているのでしょうか？比呂あすかと接触があったのは事実として確認されているわけですし、ぼくのほうで調べた例のノートを預かった山崎誠一郎とも、昔、蓮作会長は親交があった。庄川征雄殺人事件、まだ、未解決ですが、黒部湖を入れ込んだ山岳写真を発注したのは室堂建設、そして今日発生した曾孫の誘拐劇、加害者側なのか、被害者側なのか、事態は混沌としてきましたが、森中さんの推理の輪の中に、長門蓮作の姿が見え隠れするのはこれは事実です」

「しかし、血縁の者が、今度は被害者

の場に立たされている。事件の推移をわれわれとしては見守てる以外に術はないな」

「誰が司祭者かはわかりませんが、誘拐劇も魔符に関係のあることなら、奴らはまた動き出したということですよ。それだけ、尻尾もつかまえやすい。どこかでボロを出すかも知れませんが。ぼくはこの臨戦体制の中で、罠を仕掛けているのは誰かを、じっくりと見極めてやろうと思っています」

仲条は森中に力強い口調で告げた。

「黒い儀式は起きないほうがいい。もしかしたら、われわれが怖れていた第三の犠牲者が出ることになるかも知れない。しかも、今度は五歳のまだいたいけな子供だ。そういうことがあってはならない。おれはいまはそう祈るだけだ」

森中が声を潜め言った。二人とも、胸の内に暗い予感を抱いていたのだった。

あくまで、同じ連鎖の輪の中で起きている事件だという前提があつてのことだったが……。

この日、仲条は森中と話を了えたあと、予期しなかった人物から電話を受けた。岩垂六助が、問題のノートを預けた山崎誠一郎の息子、昭司からの連絡だった。

仲条は、誘拐事件を抱え、一晚、社に張りつく姿勢をとっていたが、昭司からの電話が充分に関心を持つべき内容のもので、他の記者に誘揚

事件のことは任せ、勇躍、社を飛び出した。昭司は気掛かりなことを告げていたのだ。

「父の書き散らしたものを整理していたら、妙なものが出て来まして」

午後八時過ぎの時刻、仲条は夜の街中を、車を走らせ富山市梅沢町の山崎家に向かった。

仲条は紛失したノートに関係があるものが出てきたのだと信じていた。

仲条が庄川征雄殺人事件に首を突っ込んだのは、四月末のことで、まだ、黒部湖周辺の山々には雪が残り、里の地の樹々も蕾をやつとふくらませ始めた頃のことであった。が、いまは夜の風も生ぬるくなっており、街路樹の並木も、すでに、若葉を開き切っていた。仲条は杜の車を運転していたが、道々、いろんなことを考えた。

先程、東京の森中と電話で長門雅樹誘拐事件の経過について話をし、これからの取材方針について打ち合わせをしたとき、森中は、第三の事件の発生を憂慮した。

第三の事件がこれまで同様の手口なら、第四の事件発生の可能性もあることになる？

第三の事件発生のあとは？

四羽の黒い雷鳥…四の数字が意味するものを、森中と仲条は、一つずつ、確実に黒い司祭者から示されていた。

(山崎昭司が言う妙なものとは？)

いま、仲条は、三人目、四人目の犠牲者？が発生する可能性と、その妙なものとに、何らかの関連性があるのかと頭をめぐらせていた。紛失したノートに重大な事件を解く秘密が隠されているとしたら？たとえ、そのノートの切れ端でもいまは見つけ出したい心境であった。

いま一つ、仲条には詰めたいことがある。庄川征雄が首なし死体で見えられ『黒い雷鳥』の魔符が天日の下にさらされた事実を、小矢部吾平に示せば、彼は記者稼業の範囲内では到底、追えないような新事実、又はヒントを仲条に与えてくれるかも知れなかった。

仲条が来るのを待っていた昭司は玄関で迎えてくれ、すぐに彼を応接室に通してくれた。古い書類封筒を昭司はテーブルの上に置いた。

封書の表の左隅の下に『雑感付記』と鉛筆書きの小さな文字が記されていた。

「妙な絵のようなものも記されていて……」

「は？絵ですか？」

「絵と言っていていいかどうか」

仲条は封書の中味をとり出した。ノートを破いた切れ端が五、六枚入っていた。例によって横書きの罫線の入ったもので『千の平雑感』のノートと同じタイプのものだった。ノートの切れ端には何やら文字が記されていた。

が、この文字は『千の平雑雑感』を記した岩垂六助の手になるものではなかった。

「お父さんの、書き記したもののなので
すか？これは」

「ええ、父の筆跡に間違いありません
」

その会話のあと、仲条は、絵のようなものを早く見たく、急いでページを繰った。

「あつ、これは……」

と仲条は一瞬、絶句した。

木版刷りの護符ではなく、誠一郎自身
が書き写したものだだったが『黒い雷鳥』
が四羽あしらわれた魔符の絵がページ
には写しとられていた。

郷土史家で史実集めに熱心な上に、
几帳面な性格だったせいにか、写しとら
れた自筆の『黒い雷鳥』の絵は、てい
ねいな筆致のものだった。

「何か？」

「これは、ぼくが探し求めていたお札
なんです。それにしても、お父さんが
、このように正確に書き写しておられ
たなんて」

「貴重な、これは資料なんでしょう
か？」

「まだ世には出ていない。そのことだ
けはたしかです」

仲条は、一連の殺人事件での魔符の
使用について触れたところだった、

さすがに、そのことは言いかねた。が、仲条自身の胸は高鳴っていた。次に、仲条は第一ページ目から順番に山崎誠一郎の書き残した文字を追った。『立山信仰密儀軌（みつぎき）をわたしは眼にしたわけではない。聞き書きとしてわたしが知り得たことをここに記しておく。立山信仰密儀軌第一巻は、天地人之章で、これは立山曼陀羅地獄図にも示されている六道悪趣（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道）について記したものである。これら六道悪趣については仏法に説くところなので詳述は避ける。第二巻は、立山信仰の神の領（うしは）く神体山に関する記述より成っており、主に、龍雷神をもつて立山の諸々の山の神と為すという、伝えられるところの雄山の祭神イザナギノミコトとタチカラヲノミコトの神統の神を否定するもので、これは平安以降の仏教の民心への伝播とも関係のあることと思われる。

立山の山域は高所なるが故に雷による被害も大きく、自然への畏懼（いく）がこの神の領域に、雷神信仰をもたらしたと考えられる。第三の巻は、人身御供についての密儀軌で、巷間伝わるるところの人柱伝説と無縁ではない』

そこまで読みすすめたとき、仲条の紙片を持つ手はぶるぶると震えた。『人柱伝説？』いつか、仮定の上での話であったが、民俗学の研究をしている伊

狩冴子が、黒部ダム建設時の犠牲者と生贄（いけにえ）の供儀について部分的だが触れた。あのときは、森中と仲条は、黒部人柱伝説についてあからさまにするのを避けた。

が、いま、その話は、実説黒部人柱伝説の様相を見せ始めているように仲条は思えた。

人柱伝説について、さらに、山崎誠一郎はいくつかの謎の記述を残していた。それは、四羽の黒い雷鳥が意味するものを暗示しているかのようだった。断片的なことばを拾うだけでも、仲条には感応すべき点があった。

黒い四羽の雷鳥は、東西南北に羽を広げて飛び立たんとするが、地の神となりて、暗い闇に溶け、やがて地水風湖を守り給うという。

闇夜に舞う四つの鬼火は、やがて天界に向け飛び立たんとす。

それは次なる四つの魂を呼ぶ霊力の叫びであるという。

他にもいくつかの関心を引く記述があったが、仲条に読解力はなかった。（民俗学者の伊狩冴子にこれは分析してもらわなければ）

と仲条は考え、昭司に、このノートの断片を貸してくれよう頼んだ。

「もちろん、その気で仲条さんをお呼びしましたが、その黒い雷鳥の絵は何か特別の意味でもあるのですか？」

昭司は文章のほうには眼を通してい

ないらしく、いちばん仲条が関心を示した絵柄について再度問うた。

「どうやらこれは、お守り札の一種のようです。ご存知かも知れませんが、白い雷鳥に雲を配した護符がありまして、そちらは雷除けのお札としてよく知られているんです。しかし、黒い雷鳥についてはわたしの知る限り、民間信仰の一つとして残っている形跡はありません。やはり、特別の意味のあるお札なんじゃないでしょうか」

「特別の：おまじないの札とか、不吉なことと関係でもあるのですか」

「いいえ。そのようには断言できません。ともかく、山崎さんのお宅には一切迷惑が掛からないようにしますからご安心下さい」

「あの、新聞に立山信仰の話に掲載するという話ではなかったんですか？」

「いえ、その、そちらの企画もいま進行中です。何ともいまは申し上げられませんが、別のテーマもあって、ちょっとそっちのほうが取材としては先行しているものですから」

仲条としては苦しい言い訳をした。

昭司はちよっと不審気な面持ちをし、仲条の心の内を探る眼になった。

「どうもすみません。あの、それから、他社との兼ね合いもあるもので、このお父さんの遺された資料については他言無用に願います」

「それはいいですが」

「そうですね。この資料のことを知っているのはわたしと山崎昭司さんだけ、変なことを言うようですが、一つ、その線ですごくお願いしたいのですが」

仲条の念押しに頷いたものの、昭司はまだ解せぬ顔つきをしてみせた。

4

六月六日、朝は白々と明けた。

雷光荘ホテルに陣取った捜査班は不眠不休の体制で、犯人からの電話を待ったが何の連絡もなかった。

が、犯人側は意想外の動きを見せた。東京・白金台にある室堂建設会長、長門蓮作の邸に身代金要求がもたらされた。七十八歳になる蓮作は、いまも朝起きると緑の敷き詰められた庭の芝生の上に降り立ち、日本刀の真剣をかざして、身心の鍛練につとめていた。一汗掻いた蓮作は、袷着（あわせぎ）の片肌を脱ぎ、庭先から引き揚げて来たところだった。

「旦那さま、男の方からお電話が」

手伝いの女が伝えに来た。

「誰からだ。こんなに朝早く」

「お名前を伺ったのですがおっしゃいません。何かおそろしい感じですか」

「おそろしい？ わしに楯つく者がおるのか。面白い、すぐに出るから待てと

言え」

「はい」

女はその場を引き下がった。

蓮作は腰に下げた日本手拭で脇の下の汗を拭うと座敷に上がった。

六尺近い堂々とした体躯で背もしゃんと伸びており、鬘鑠（かくしゃく）としていた。

「何者だ。この朝から」

蓮作の第一声は、相手をのんでかかったものだった。

「横柄な口はきかんでもらいたい。いか。よく聞け。お前、爺いだから物おぼえも悪いだろうからメモを取れよ。大事なことを言う。黒部峡谷鉄道の錦繡橋（きんしゅうばし）の橋桁（はしげた）に一億円の札束を入れた袋を午後二時まで吊るしな」

「朝から何をたわけたことを言っておる」

「お前の曾孫に当たるんだってな。長門雅樹というガキは。そいつを誘拐した」

「馬鹿なことを言うな。だいいち、曾孫とわしとどういう関係がある。知ったことか」

「おい、じいさんよ。嘘だと思ったら雷光荘ホテルに待機している誘拐特捜班のデカ連に電話してみろよ。いいか、もう一度言うぞ。ボケ老人相手にしたんじゃ、こちとらも商売上がったりだからな。あの有名な錦繡橋さ。あの

橋桁に現金一億円の束を吊り下げて欲しいのよ、わかったな」

「おい、待て」

と蓮作は声を掛けたが、相手の男はそのまま電話を切ってしまった。

しかし、蓮作は慌てず、ふーと吐息を一つ吐いたあと、書齋をひとわたり歩きまわり、それが癖なのか、顔を天に向け、両眼をかつと見開いた。

同じ仕種を二度三度と繰り返す。

それから次男で、室堂建設社長の啓作を書齋に呼びつけた。

「何の騒ぎか。朝から騒々しい奴がいてな。一応、宇奈月のほうに電話してやってくれ」

慌てたふうに、啓作が用件を受けた。

当主の蓮作は老人顔にはちがいないが、肌艶は良く老齡には見えない。

短く刈った髪は白かったが、何より眼に威光があった。動揺も示さず、皮製の応接ソファに身を埋めたまま、顎先で啓作を使った。

「誘拐事件ですか？何のために？」

「金だろう。室堂建設に金をたかろうとする奴は、ゴマン」といる。政治家から、こう言った手合いまで、一々、相手にしては、身がつとまらんよ」

「一億円などと」

「別に惜しくはないが、相手による。利が利を生む金なら捨てても惜しくはないが」

そう言い、もう一度、蓮作は顎をしゃ

くった。早く電話をしろという仕種だった。啓作は電話のダイヤルを回した。

その横顔は、蓮作ほどは、きびしさはない。政治家の秘書を長年つとめてきたこの男は、権力のある者には媚びへつらう癖がある。

いまは、蓮作には頭も上がらぬと言った態度を示していた。

「もしもし、東京の啓作だが、妙な電話がこちらに入ってね」

その啓作の第一声に、雷光荘ホテルに待機していた連中は一気に眠気を覚まされた。応対には、長男の作之介が出た。はじめに両者の間で、雅樹の誘拐の事実が確認された。身代金、一億円。持参場所、黒部峡谷鉄道の峡谷に架かる錦繡橋。持参日時、六月八日、午後二時。これらの、犯人側からの指示事項だけが、雷光荘ホテルにいる者に伝えられた。

「一億円など……」

と作之介が声を詰まらせた。

「金の工面だがちよつと待ってくれ」

相手を待たせたまま、啓作は蓮作にお伺いを立てた。

「馬鹿を言っている。余程、頭の悪い連中だな。おいそれと、宇奈月の田舎街に、一億円の金が揃うとも思っているのか。そんな無駄金はこちらにもないし」

「しかし、万が一、雅樹の命にかかわるようなことになれば……」

「錦繡橋か。あの高い鉄橋に一億円をぶら下げるとは気がいじみてるな。どうやってその金を回収する気だ。その連中は？」

「さあ？何とも。たしかにこれは馬鹿げた話です」

「それらしい偽の札の束でもぶら下げておけばいいんだ。精々、カラスが突っつきに来る程度のことだろう。警察がもう張りついていてるようだが、一億円の心配をするより、人命を守るためにぬかりなく行動せよと、そう言つてやれ」

蓮作は曾孫の大事に際しても、動顛しているふうはなかった。

「室堂建設の富山支社なら一億円を調達するのは可能じゃないか」

啓作は富山にいる蓮作に、話を、そのまま伝えた。

「無駄だ。よく考えてみる。本気で相手が金を奪う気なら、このわしから直接一億円をもぎとるはずだ。わざわざ、わしのところに電話を掛けて来ておいて、このわしに金を要求せんとは間抜けた奴らじゃないか。それとも警視庁と富山県警を天秤にかけて、あちらのほうが組みしやすしと考えたか」

「ともかく、金のほうは？」

「どうせコケおどしの連中だ。二度、三度と交渉するうちに、一千万ぐらいのところまで妥協するに決まっている。錦繡橋を金の持参場所にしたのだっ

て、まず、警察の動きを、遠くから見物して様子を見るといいう作戦にちがいない」

その蓮作の考えを、啓作がまわりくどい言い方で作之介に説明した。

受話器を握っていた作之介は、怒った口調になり、直接、父親に電話口に出るように求めた。それで、のっそりと立ち上がり蓮作が受話器を握った。

「お父さん、孫の生命が…」

「大騒ぎするな。余程の兇悪犯でない限り、子供の命までは奪わんさ。ともかく犯人側の出方をまず待て。それから、金のことだが、交渉の窓口は室堂建設の会長秘書室を指定しろ。警察が頼りないようなら、うちの会社が契約している警備会社に話をつける。政治家のVIP警備も引き受けている会社だ。ガードマンのほうが、隠密に動けて、これは頼りになるかも知れない。それから犬伏美千雄に頼んで、富山県警にもハツパを掛けさせることにしよう」

「ではすぐにでも…」

「だから言っているだろう。はじめは富山県警の顔も立てんとな。本日の午後二時だ。その結果はちゃんと知らせてくれ。富山県警がヘマでもやったらすぐにでも、わしが動く」

「ですがそれまでに雅樹が…」

「馬鹿を言うな。金も獲らないうちに生命を奪う誘拐犯などおらんよ、落着

け」

「…は、はい」

作之介のそばに控えていた富山県警の秘密捜査班の面々が、かすかに首を縦に振った。話のやりとりは筒抜けになっっているわけだから、捜査班の連中は明らかに不快感を面に表していた。富山県警に対して、ハナから蓮作は相手にしていかない口吻（くちぶ）りだった。作之介は捜査班の面々の顔色もみとって、結局、受話器をおいた。

「錦繡鉄橋で午後二時か。あの地域に入るには峡谷地帯だけに、ふつうの者では踏み込めない。それに、現金の回収方法だが、鉄橋にぶら下げるとは、こちらをナメて掛かっているな。ヘリコプターで飛んで来たとしても不可能だ。犯人側は警察の動きを見るために、たしかにこんな作戦を立てたのかも知れない」

富山県警のリーダーの刑事が、忌々しそうに言った。一部は、長門蓮作の見解とも一致していたからだ。

直ちに、誘拐事件の本部のおかれた黒部署に、犯人側からのメッセージは送られ、緊急出動体制が敷かれることになった。

黒部峡谷鉄道は宇奈月温泉駅から櫛平（けやきだいら）まで全長二〇・一キロメートル、赤いトロッコ電車は、黒部峡谷の自然の景観をたっぷり堪能させてくれる乗物として観光客には人

気が高い。

そそり立った岩肌に、深く切り込んだ岩の谷、大瀑布（たいばくふ）、黒部川の激流に澄んだ水、どれも秘境の味を満喫させてくれる。

犯人側が指定してきた錦繡橋は、鐘釣（かねつり）駅手前の錦繡関の渓谷に架かる橋で、黒部川の渓流から約百メートルの高さにあった。

夏は緑、秋は紅葉に染まる一帯はその名のとおり、緑や、黄葉、紅葉を織りなしたような景観であることから錦繡関の名がついた。

富山県警・黒部署の捜査員は、現地に赴いたが、錦繡橋の周辺に網を張ることは、険しい地形から無理だと判断、黒部峡谷鉄道の鉄路を固め、また、溪流歩きのみ道や、付近の山路などに目立たぬよう人員を配置、出入者のチェックに主眼をおいた。

数人は錦繡橋下の溪流に苦心の末降り、待機の体制をとった。

宇奈月温泉駅発の一番電車で刑事が数名乗った。単線運転なので櫛平までの九十分間の旅程、また復路の櫛平発、宇奈月温泉駅のトロッコ電車にも、乗客を装った刑事たちが便乗し、不審者の発見に努めた。

だが、長門雅樹生存の情報はこの段階でも皆無だったので、黒部署の捜査責任者は憂慮の色を濃くしていた。

長門雅樹が生存しているなら、その

生命を駆け引きの条件にし、犯人側はもっと綿密な作戦を立てて来るはずである。また当初から「警察に知らせると子供のいのちはない」と通常の誘拐犯たちは通告してくるのに、どこか今回の誘拐犯は緊張感を欠いていて、そんな脅し文句もぶつけて来なかった。

それに現金一億円の札束を橋脚に吊るせなどというのも不真面目な要求だったし、現金持参者についての指名もないズサンさだったので、富山県警の特捜班は、現金略取の誘拐ではないのではないかと危慎を抱いていた。

つまり、子供の生命を狙った誘拐事件？と捜査のプロたちは捜査方針会議で、この考えも明らかにしていたのだった。

総勢三十名余の捜査員たちが、錦繡橋の現場周辺には駆り出された。特に橋脚に直結したかたちの長さ百メートルほどのトンネル内は事前検索されたが不審者は発見されず、なお用心を期すために数名がトンネル内に残った。

十三時二十四分発樺平発のトロッコ電車が三十分後に錦繡橋を通過した。十三時五十四分のことであった。

六月八日、ウィークデーのことだったが、近頃は中高年者の旅行好きは定着していたから、錦繡橋をゆっくり通

過して行った七輛編成の赤いトロツコ電車は、ほぼ、満員の盛況だった。

定刻二時を過ぎたが、犯人側の動きはない。

次に錦繡橋を通過するのは宇奈月温泉駅十三時十八分発の電車で、予定通りだと、十四時十八分頃に姿を見せることになる。

富山県警・黒部署の専属捜査班のメンバーが討議をつくし、想定される現金奪取の方法を想定した。

最も現実的な方法は、トロツコ電車を錦繡橋上で停止させ、乗客を人質に取り、現金奪取を図る計画だった。

勾配や、カーブの多い黒部峡谷鉄道の平均時速は十三・四キロメートル、犯人が行動を起こすには適した条件が整っていた。

しかし、現金を奪取したとしても、ヘリコプターでも上空に飛来しない限り、犯人らはこの秘境の地から脱出は不可能だったのだが……。

十四時十八分、赤いトロツコ電車が宇奈月方向から姿を現し、櫛平に向けて錦繡橋の上を通過して行った。

もちろん、前の電車にも、この通過して行く電車にも数名の刑事が同乗していた。

だが、電車が自然の溪谷を縫うようにして走り去ったあとにも何事も起こらなかった。

ロープで吊された札束だけが、わずかな風に揺れており、新緑の目立ち始めた山々の樹葉が微かに風の音を伝えているだけだった。前線本部の設けられた近くの鐘釣駅の駅員室の電話が、捜査指揮官の耳に、悲報を伝えたのは十四時三十二分のことだった。

長門雅樹は、宇奈月温泉街からさらに山の側に入った黒部川の尾沼谷付近の河原で死体となり発見された。

溪流釣りに入った釣客のグループが、河原を血に染めている男の子の惨殺体を見つけ通報したのだった。

このとき、鐘釣駅の前線基地には、長門雅樹の死体発見の事実だけが送られて来たが、富山県警は犯人に第二の挑戦状を突きつけられていた。

長門雅樹は首なし死体で、また、首の切断口には『黒い雷鳥』を四羽あしらった魔符が一枚貼りつけられていたのだった。

日報新聞・富山支局の仲条立彦は、誘拐された長門雅樹の動向を追っていた一人だった。

社のデスクに張りつき、警察側の捜査過程の発表を待っているときに、長門雅樹の遺体発見の報を知った。

情報をくれたのは赤根刑事だった。

直ちに、仲条は黒部川の尾沼谷にカメラマンと共に向かった。

北陸自動車道を利用し、一路、北を目指した。黒部インターチェンジを降

り、犯行現場に辿り着く予定だった。

ハンドルを握ったカメラマンは、高速路では常時百キロを越すスピードを出した。出発十五分後に仲條は携帯電話を手に取り、相手に発信音をとつけた。相手は上市署の赤根刑事だった。

「もう特ダネのほう隠しておくことはないぞ。酷い話で口にしにくいのが、被害者はまたまた首を切断され、その首は持ち去られたあとだった」

「えっ、また首なし死体？」

思わず、仲條は問い返し、ごくりと一つ生唾をのんだ。

「宇奈月は黒部警察署の管轄だから、おれがしゃしゃり出る幕じゃないが、どうやら、また、例の、黒い雷鳥のお札が現場には残されていたらしい」

「首の切断口にですか？」

「そこまではわからん。上市署のほうには、変なお札と一緒に発見されたと報告が来ているだけだ」

「まちがいなく、同一犯人ですね」

「早まることはないが、いかにも挑戦的ではあるな。やっぱり、きみが主張している黒い儀式のようなものが裏にはあるのか」

「殺人行為をゲームとして楽しむ人種か、何か秘密めいた儀式のために、魔の札を天日の下にさらし出しているのか、二つに一つ、わたしは立山信仰の裏にある黒い秘儀だという確信を深めてはいますが」

「何だ。例の女教祖もそれだと今度の話には登場することになる？それにお前さんが口にした人柱の話、現代に生きる人柱伝説？あれもちよつとな。警察内部で大真面目に、日報新聞社説を披露したら、まちがいはなくおれは刑事稼業を辞めさせられる。それでなくとも、まだ、片腕は痺れが時々あつて犯人（ほし）の首っ玉をつかむわけにはいかん状態だ、おれは」

「東京での比呂あすか殺人事件、そして富山で起きた二件の首なし殺人事件、いつか、赤根さんは言ったじゃないですか。ほら例の地球儀の話ですよ」

「地球儀？」

「事件の発展の様相、事件の起きた地点だけに足を着けて眺めていたんじゃない、事件解決の糸口はつかめませんよ。地球儀に記された赤い日本の地図、二歩、三歩退いた高見の場所から見渡すと、東京と富山で起きた三つの首なし殺人事件、ぼくには一本につながれた線のようなものが見えて来るんです」

仲条はむしろ自信たつぷりの口調で言った。

「わかった。これからは、はぐれ刑事の活躍の場かも知れんな。その頃には、リハビリの成果も上がって、屈強の男の二人や三人、相手にできるようになってきていることだろうよ。それじゃ、ま、健闘を祈るよ」

赤根刑事は仲条を励まし、電話を切

った。6長門雅樹の遺体発見現場に仲条が到着したのは遺体発見後、三時間あとのことだった。

まだ、犯行現場のまわりは立番の警官がガードしており、一部にはロープも張られていた。

尾沼谷は駒ヶ岳、僧ヶ岳、烏帽子（えぼし）山を背後に控えた沢地で、川の流れは迂余曲折して黒部川へとつながっている。

字奈月温泉からだ和小一時間ほど山中に入った地点が、遺体発見現場だった。

新緑の萌え出たあとの緑が眼に染みるほどに爽やかで、雪水を溶かした清流はまさしく春のせせらぎという感じだった。仲条は清々しいまわりの景色を見て、ふーと、一つ吐息を吐いた。

生命の新しさがあたりを活気づけているのに、白い砂地の河原には、被害者の幼児の遺体が、真新しい毛布におおわれ、置かれていた。

その傍らに、花束が添えられているのが何とも痛ましい。

河原の岩山の陰に、長門栄、奈美子の両親の姿があり、呆然と立ちつくしている。二人はひとしきり泣いたあとなのか、泪も枯れたという虚脱ぶりだった。

祖父の長門作之介の姿は見当たらない。鑑識課員がまだ現場には残っていて、足跡や、車のタイヤ跡、犯人の遺留

小矢部吾平。

小矢部岳男 ……。

それとも、真光命教の女教祖、真如尼こと、野々村芳子？長門雅樹が無惨な死体で発見されたことで、長門一族にもその魔力が及ぶ？

長門作之介に、栄、奈美子……そして、東京にいる室堂建設会長の長門蓮作に、社長で次男の長門啓作？

それから、あの『千の平雑感』のノートにいわくがあるのだとしたら。山崎昭司一家もその対象者に？彼らが第四のターゲットになり得るとしたら？

が、この考えの裏で、仲条は、同時に彼らは加害者の立場に立ち得る人物たちであることにも気づいていた。

室堂建設会長、長門蓮作、社長の啓作以外の全員に、仲条はすでに会っていた。

いや、正確に言えば、間接的にはあつたが、仲条は室堂建設社長の長門啓作とも顔を会わせていた。四月二十五日の立山黒部アルペンルート開通式のセレモニーに、地元出身の名士として長門啓作は参加し、晴れ晴れしい顔で、ルート開通を祝う赤白のテープに、はさみを入れていた。

その写真を仲条は撮り、翌日の朝刊に記事と共に掲載した。

つまり、仲条が、今度の一連の事件で、まだ、直接、顔を合わせていないのは、室堂建設会長の長門蓮作と、蓮作や、啓作につながる建設業界の実力者、代議士の犬伏美千雄の二人だけとなる。

草地の丘のあたりに人の動きがあった。

仲条は車を出、自分の持ち場にもどった。

鑑識課員が引きあげるところで、彼らと一緒に、黒部署の特別捜査班のスタッフも、草地の丘のほうにやって来た。

目敏く、第一捜査課長の顔を見つけた記者がすり寄り、五、六人の新聞記者が、課長のまわりを取り囲んだ。

「おれは何もしゃべらんぞ」

捜査課長は記者たちを睨みつけた。

「首なし殺人、ずいぶんとひどい話じゃないですか」

と、一人の記者がことばを浴びせたことに、捜査課長はかちんと来たようだった。

「しゃべらないたって、それじゃ、われわれは商売になりませんよ」

「うるさい！」

捜査課長は懲りずに、ことばを続けた件（くだん）の記者の顔を今度は、真正面から見据え、怒鳴った。

「署に帰ってからだ」

と他の捜査官がこの場をとりなした。

それで、七、八台の車が列をなし、宇奈月経由、黒部市にまで至る富山地方鉄道沿いの道を同行する羽目となった。

約二十キロほどの行程である。

時間は午後四時前で、どうせ、夕刊紙には記事は間に合わない時間だった。

黒部署もそのへんは心得ているのか、記者たちはたっぷり待たされた。

記者会見が行われたのは午後六時三十

分すぎのことだった。

長門雅樹誘拐事件の経過説明、警察の対応策には落度はなかったことなどが、予め用意された書面を読むかたちで署長から発表された。

このあと沈痛な面持ちで署長が、遺体発見の状況、死体損壊の状況などについて説明を加えた。

「検屍の結果は、体には外傷はなく、犯人は雅樹ちゃんを誘拐直後、絞殺したものと思われる。首は切断されていたが、兇器はいまのところ断定されていない。切断は絞殺数時間後と思われるが、その時間についてはただいまの段階では特定されていない。五歳の幼児が命を奪われ、かつ、首を切断されており、その首は未だ現場からは発見されていない。事件が事件だけに、各報道機関ともこの種の事件については、慎重な配慮をした上、報道していただきたい。以上である」

署長は唇を引き締め記者たちに対した。

「十分に限定してのことですが、質問があれば受けます」

捜査一課長が仏頂面のまま言った。

「五月五日に遺体の発見された庄川征雄殺人事件は、まだ、未解決ですが、今回の雅樹ちゃん殺人事件とは何らかの関連性はあるのですか？」

他社の記者がはじめに質問をした。

「質問の要旨がはつきりしません。いまは、雅樹ちゃん誘拐殺人事件についての質問を伺っています」

捜査一課長は記者の質問をかわす。それらの事件は上市署管内で起きたこと、当方は預かり知らぬといった体の対応の仕方だった。仲条はその記者の顔を見た。

視点としては悪くないと思うと同時に、この記者の質問が波紋を広げることに関心した。それで、すかさず、仲条は他の視点の話にとキューを振った。

「誘拐犯人からの家族への接触ですが、身代金の持参場所を、懸崖の地の錦繡橋を指定してきたことに、警察は不審を抱かなかったのですか？つまり、それは陽動作戦であって、犯人側はフェイントを掛け、その間に、安全圏内に逃走したのではないでしょうか？身代金持参の指定時刻前に、雅樹ちゃんは殺されていた。さっきの説明だとそういうことになりませんが」

この誘拐劇の顯末は初めに、署長が文面を読み、事件発生から、本日の遺体発見までの経過説明を行っていた。

「そのように判断できません。しかし、どのような陽動作戦であれ、警察は犯人から指示があった以上、対応策をとります。子供のいのちがかかっているわけですから」

「警察の対応にぬかりはなかったとは思いますが、さっきの誘拐についての経過説明で、犯人側は東京の室堂建設会長、長門蓮作氏の自宅宛に、身代金要求をして来たということですが、これは、長門蓮作氏も誘拐事件に巻き込まれたということであり、企業絡みの恨み、または蓮作氏個人への恨みという犯行動機の可能性については捜

査当局はどのような見解を持っていますか？」

他社の記者が鋭い質問をした。

この室堂建設会長が、誘拐事件に参加させられていたという話は、さっきの署長の説明で仲条もはじめて知った。

室堂建設会長が誘拐事件に関与させられた件について、仲条は長門一族が、三つの殺人事件の連環の輪の中にいずれも登場していることに気づいていた。

それで、この他社の記者の質問が、やはり、鋭い点を衝いていることに、内心どきどきとした。

「お説は承っておきますが、長門蓮作氏にとつて雅樹ちゃんは何孫に当たる血縁者です。企業絡みの恨み？個人への恨み？室堂建設が何者かに恨みを受けているという情報も蓮作氏自身についての情報も当方にはありませんので、お答えできません」

捜査一課長はまた記者の質問をかわした。実のところ、仲条立彦は、庄川征雄も首なし殺人事件であったこと、そして、富山で起きた連続殺人事件に、魔符が用いられていたことが、ライバル社の記者連に知られることを怖れていた。

日報新聞だけが握っている極秘情報は、特ダネだったし、また、記者独自の視点で事件の真相解明に立ち向かうには、二つの極秘事項が、キーポイントになることは、まちがいのないという思いも仲条にはあった。

黒部警察署は、特に庄川征雄殺人事件と

、長門雅樹誘拐殺人事件の二つを関連づけ
ては見ておらず、また『黒い雷鳥』の魔符
についても記者会見場では発表しなかつた
。十分の制限時間が来て、記者会見は時間
切れのまま終わった。

第一発見者の釣客二人が、やっと黒部警
察署への取り調べ協力を了えて解放された
。ひとしきり、彼らは新聞記者に取り囲ま
れた。二人とも青い顔をしており、口が重
かった。

報道関係者から二人が解放されたあと、
仲条がそのうちの一人に声を掛けた。

「どちらの方角にお帰りになります」

「宇奈月温泉だが、もう一度、あちらの方
角にもどるといいのはいい気がしませんね
。第一発見者ということ、わたしたちに
も嫌疑はかかっているんですよ。とんだ事
件に巻き込まれてしまったものだ」

「でも、いずれにしろ、宇奈月温泉にはも
どることになるんでしよう」

「ええ、そうですが」

「それじゃ、うちの社の車でホテルまでお
送りしますよ」

仲条はうまく持ち掛け、第一発見者の二
人を自分の車に乗せた。

車のハンドルを握りながら仲条はそれと
なく、外堀から埋めて行く術で、やんわり
と、二人に話を持ち掛けた。

「刑事（でか）どもは、事件の周囲にいる
者は誰でも犯人と思っっていますからね」

「まあ、疑われたというわけじゃありませ
んが、現住所から会社の名、家族関係、そ

れに、宇奈月に釣りに来た回数までうるさく訊かれました」

二人とも六十に手のとどころという齢で、富山市内の警備会社に停年後就職している身であった。

ビルの改築で一週間ほどの休暇がもらえ、好きな溪流釣りに誘い合って来た末のとなだ災難ということに話ではなる。

「刑事ども、あれでなかなか取り引きするのがうまい。ね、お二人とも、何か口止めされたでしょう？」

相手を油断させておいて、いきなり、仲条はたずねた。バックミラー越しに後部座席の男の顔を観察した。

「……」

二人とも黙ってしまった。バックミラーに写った男の表情は硬張っていた。

「そうですね。わたしが言うことがほんとうなら返事をして下さらなくて結構です」仲条はそう二人に前置きしてから、

「思い出させて申し訳ありませんが、死体の首の切断口には『黒い雷鳥』が四羽配されたお札のようなものが付着していませんでしたか？」

二人とも返事をしなかった。

そのまま、仲条は車を走らせた。

男の一人が「ふー」と緊張に耐えかねたように息を吐き出した。赤根刑事が自動車電話を通じ伝えてきたことはほんとうのようだった。

ややあつてから、

「大丈夫ですよ。あなた方は何もしゃべっ

たわけじゃないんですから」

と仲条は二人を安心させるためにことばを用意した。まちがいなく二人は、魔符の存在を眼に止めたようだった。

(第四章 了)